

文化活動から労働運動へ

——天達忠雄の青年期の活動に焦点をあてて——

渡 邊 かおり*

はじめに

天達忠雄（1912年～1981年）は戦後に明治学院大学の教員として教鞭をとりながら、自治労で講師をしたり、朝日訴訟を提訴時から積極的に支援したりするなど、戦後日本における社会保障・社会福祉の発展に多大な寄与をしたことで知られている。その経歴は、戦前に明治学院高等部社会科（後に社会事業科）で学び、中央社会事業協会社会事業研究所の社会事業研究生として研修を受けた後、社会事業研究所で働いたという、戦前では極めて珍しい社会事業ひとすじの道を歩いている。またその間、社会事業の学習や研究を行うだけでなく、明治学院におけるセツルメント運営や、下関における労働運動にも積極的にかかわった。

天達は自らの過去について、『記念樹とともに—明治学院大学社会学部50周年特集—』の中の「社会科から社会学部へ—1 教員の年代記メモ—」（以下、「年代記メモ」と略記）で語っており、それに基づいて天達が亡くなった後に『天達忠雄追悼文集』等に掲載された「略年譜」が作られている¹⁾。また、天達に焦点をあてた研究に遠藤興一（1990）があり、福田正義（2002）は下関における天達の労働運動について論じている。

本稿ではこれらの先行研究を踏まえつつ、文章を書くことや建築設計に夢中になっていた青年時代の天達が、次第に労働運動に興味を持つようになった過程に焦点を当てて論じる。そして、社会保障の推進や人権を守る取り組みを生涯に渡って行った天達の思想と実践が、青年期にどのようにして生まれたのかについて探ることとする。

第1章 誕生から中学卒業まで

1 下関への転居

天達は1912年4月15日に、兵庫県で父・彌七と母・八重の第4子として誕生した。「年代記メモ」において天達は「但馬の国（現在の兵庫県）北の方の山村」で生まれたと述べているが、戦時中に捕らわれた際の特高警察による調査資料では、天達の本籍地は鹿児島となっている²⁾。これは、天達の父親が鹿児島出身であったためである。天達の父親は、鉱山事業所監督や所長として転勤を繰り返しており、天達が幼い頃は愛媛の銅山で働いていた。このことと関連して、天達の社会事業研究所の同僚であり、後に明治学院大学でも同僚となった重田信一は、「天達家は代々薩摩藩の鉱山技術者の家柄で、あまり身分も上ではなく、山ばかり歩いていたようだ」と語っている³⁾。天達が労働の問題に関心を持つきっかけの1つとして、鹿児島に本籍がありながら、全国各地を転々としながら働く父親の姿を見たり、鉱山労働の厳しさを感じたりしたことがあったと考えられる。

幼い頃の天達は母親と2人暮らしであったが、6歳の時に父親が迎えに来て大阪経由で四国山脈にある鉱山に移り、その後小学校に入るために町に下りて母親と生活するようになった。さらに、天達は小学校入学後に親の仕事の都合で3回転校をしたが、小学4年の時に姉がいた下関に転居し、後に母と2人暮らしとなった。そして、中学2年の時に母親を亡くすが、それから明治学院に入学するまでの時期を下関で過ごし、病気等を理由に明治学院を1年半あまりで退学した後、療養のために再び下関に戻っている。つまり、天達は1920年代初頭から1930年代前半まで、す

なわち10代前半から20代前半にかけての多感な時期を下関で過ごすこととなった。

下関市は山口県の西方に位置する本州最西端の市であり、関門海峡を隔てて対岸には九州の門司市（現・北九州市門司区）があった。そして下関は日清戦争、日露戦争、第1次世界大戦、日中戦争などで後方輸送地として重要な役割を果たした要衝であり、1905年には下関と釜山の間を運航する関釜連絡船も就航した。さらに、下関が貿易港として使われるようになる中で、1901年にイギリス領事館が開設されたのを皮切りに、1930年までに8カ国の渉外機関が設置されるに至った。『下関市史 市制施行以後』には、「このように多数の外国の渉外機関を持つ都市は、東京・横浜・名古屋・大阪・神戸などの大貿易港市をのぞいては、長崎と本市くらいのもの」とあり、交通・貿易の要衝としての下関の重要性がうかがえる⁴⁾。実際、1920年の国勢調査で下関市の人口は72,300人だったが、10年後の1930年には98,543人に、さらに1940年には196,022人へと増加し続けており⁵⁾、戦前の下関は貿易港として繁栄をみせていた。

だが、活況を呈する下関においても、取り組むべき課題が生まれていた。それは、失業等生活にかかわる問題であり、とりわけ関釜連絡船によって渡航してきたものの、仕事がなく路頭に迷っていた朝鮮人たちの問題は深刻であった。1918年から1931年までの間に関釜連絡船による朝鮮からの来住者は約122万人、帰国者は約95万人、国内残留者は約27万人であった⁶⁾。国内残留者のうち、下関に滞在した朝鮮人の保護救済にあたるために、1928年5月に公益法人山口県社会事業協会によって、下関の大坪町に「昭和館」が設置された。そこでは、簡易宿泊、職業紹介、授産、教化、保護救済、児童の就学準備教育などの支援が行われた。天達は当時の朝鮮人の様子を「極めて貧しい生活を強いられ、とくに恐慌下で仕事もなく、ほとんどが失業状態に近かった」と述べている⁷⁾。このように、天達は10代の頃から下関における朝鮮人の生活の苦しさを目の当たりにして心を痛めていた。

2 キリスト教との出会い

次に、天達の思想と行動に影響を与えることとなったキリスト教との出会いについて確認する。天達は受洗後、生涯を通じてキリスト者であったが、そのことをあまり公言していなかったようである。実際、戦後に天達とともに『日本の労働者』⁸⁾を編集するなど、天達と30年以上つきあいのあった坂寄俊雄は、天達

の告別式がキリスト教によるものであったことが「マルクス経済学者、労働運動家として接してきた私にとってはまったく意外であった」とし、「信者としての天達さんに30余年間接する機会がなかった」と述べている⁹⁾。しかし、進路の選択や社会活動への取り組みの場面はもちろん、その後の妻との出会いを含めた天達の人生において、キリスト教から受けた影響は少なくないと考えられる。

天達が洗礼を受けるきっかけとなったのは、中学2年の時に母親を亡くしたことであった。その時の感情について、天達は「母が死んではじめて、社会から吹き寄せるさまざまな『風圧』——これは、それまで母がさえぎってくれた——と、もろにぶつかり、『これからは1人で生きなければならない』と実感として味わいました¹⁰⁾と語っている。また、「中学2年で母が死に兄達とも離れ、孤独で“人生如何に生くべきか”ということを考えて¹¹⁾」ために、トルストイの『人生論』などを読みふけていた。そうした中、中学4年の時に上級生でキリスト者の友人である小辻豊の影響を受けて日本基督教会下関教会に通うようになり、1929年4月に洗礼を受けてキリスト者となった。天達が17歳になるかならないかというタイミングであった。

天達が通っていた日本基督教会下関教会（現・日本基督教団下関教会）は、下関においてもっとも早くから伝道を行っており、1893年に西之端町に設立された会堂は、1917年に田中町へと新築移転された。戦時中の下関への空襲によって、下関教会も含めた市街地の多くが焼失したため、現在の会堂は戦後の1949年に焼け跡に再建されたものである。天達はこの教会において青年会をつくったり、日曜学校の教師をしたりしたというが、残念ながらその記録は残されていなかった¹²⁾。青年会等の活動を行う中で、教会が牧師排斥と牧師支援の両派に分裂したことによって、天達は「教会というもの」に若干の疑念を抱くようになったが、教会を離れることはなかったという¹³⁾。

また、中学時代の天達は、教会以外の場面においても様々なことに関心を抱いていた。天達と小・中学校の同級生であった天本一雄は、中学3年生から4年生のころの一時期、天達が建築設計に熱中していたとしている。その様子は「高等工業の建築科へ行きたいといい出す」ほど熱烈なものであったが、「なにか思うところがあって断念したものらしかった」ため、この建築フィーバーは続かなかったという¹⁴⁾。しかし、後

に天達は社会事業研究所所員として東北における農村調査の結果を発表した際、「6番農家見取図」や「24番農家見取図」を作成し、「フトン」、「イロリ」、「オケ」、「ガラクタ」、「ハシゴ」、「自テン車」など家庭で使用する物をわかりやすい絵や図で示した上で、各部屋の広さや部屋の使用状況等について説明している¹⁵⁾。これらは当時の東北の暮らしについて理解する上での貴重な資料であり、建築設計に熱中した成果が後に発揮された例であろう。

その後、中学5年になった天達は、教会関係の仲間とともに、『愚人』という同人誌を発行した。天本は、「天達君の社会事業に対する開眼はこの時の交友に負うところが大きいようだ」と語っている¹⁶⁾。天達は明治学院入学後にも仲間とともに作った小冊子や雑誌に作品を発表したり、明治学院を退学後、下関に帰郷してからも雑誌に投稿したりしているが、『愚人』という同人誌の発行にみられるとおり、早くも中学生の時から文章を書くことを好んで活動を始めていた。

このように、中学時代に母を亡くし人生について悩み考えていた天達は、建築設計に熱中したり、後には教会で青年会をつくったり、仲間とともに同人誌の発行をしたりするなどの活動を行った。このことから、天達にとって教会は信仰の場というだけでなく、様々な人と知り合う出会いの場であり、交流の場でもあったと考えられる。

第2章 社会問題への関心

1 明治学院高等部社会科への入学

天達は中学卒業後、1930年4月に明治学院高等部社会科へ入学した。その背景について、天達は「中学の卒業期を迎えて、旧制高校、旧制大学への進学の際は父に経済的負担をかけると考え、躊躇し、明治学院高等部社会科を受験しました」と語っている¹⁷⁾。明治学院は、ヘボン式ローマ字の考案者であるヘボン(Hepburn, James C.)が横浜に開いた「ヘボン塾」にルーツを持つキリスト教主義教育を行う学校である。前述したように、天達は下関中学校時代の友人である小辻の影響で教会に通うようになったが、明治学院も小辻に勧められて入学している。また、天達は「キリスト教主義の学校で社会の問題を教えるところが明治学院にあるというので昭和5年に入りました」とも述べており¹⁸⁾、「社会の問題」を学びたいという明確な意思を持って入学を決めた様子がかがえる。

入学してからまもなく、天達はセツルメントに参加

するようになった。明治学院では1929年10月にセツルメント発足のための動きがあり、1930年2月に東京府荏原郡大崎町居本橋47番地の借家にセツルメントが開設された。当時の総理(学院長)であった田川大吉郎は、社会事業教育に熱心に取り組んだが、セツルメントの開設もその一環であった。その背景には、「社会科の実習のためということもあったが、コンミュニズムの擡頭によって社会意識が高まった当時、過激な社会運動にはしる学生の多い点を考慮して、専ら学生の関心を社会改善にむけて、あやまり少い学生生活を送らせるようとする意図」があったとされている¹⁹⁾。また、「明治学院高等部社会科セツルメント設立趣意書」には、「同胞の生存上の悩みは日一日と深刻に街頭に現はれてゐます。病に患はされる者、失業に脅える者、義務教育をさへ受け得ずに勤労を強ひられる者、之等は瞭らかに社会改善の力の出現を待ってゐます。(中略)より深く社会の実相を知り、質実、堅忍の努力をもって時潮を率ゐんとする者は、今は宜しく街頭に進出すべきであります」とその活動の目的が力強く述べられている²⁰⁾。開設時、セツラーとなったのは、社会科2年の三吉明と、社会科1年の横山春一であった²¹⁾。

天達は入学してからしばらくの間、川崎の親類の家に下宿していたが、やがて三吉、横山とともに高輪台の裏通りの「瓦屋」3階(2階の屋根裏)で共に下宿し交流を深め、それからのちも明坊、春坊、た一坊などと呼び合っていた²²⁾。セツラーが実際に行った活動は、「子供相手の子供会や日曜学校であり、6昼間に80人もの子供が集まるという盛況であった」という²³⁾。三吉は当時の天達の印象や人柄について、「蒼白い蒲柳質の顔で、それでも一生懸命『エスさま』の話などを子ども達にしていた。子ども達がいつも彼の手にぶら下って甘えていた」、「中学2年の時に母を亡くし、もの静かな寂しそうな青年で、夏休みに帰省するのは下関の兄の家であった」、「天達は読書家というより勉強家であった」と述べている²⁴⁾。

また、セツルメント以外にも、天達は塩田章に連れられて1人で伝道を行っている人を訪ねる経験をした。その時、1人の老人がやって来て、「若い者は頭で考えようとするからいけない。足で考えてみなさい」と言ったことについて、天達は「この言葉をきいて、私は瞳からウロコが落ちたような感慨をもちました」と語っている²⁵⁾。この経験は天達にとって忘れがたいものとなり、その後の労働運動や社会事業研究所

における調査活動においても、天達は書物を読んで考えるだけでなく、活動に参加したり現場に行き見聞きしたりするなどしてその実態を明らかにしようと試みている。さらに後年、天達は教え子に対し、「考えるということは、机の上で思いをめぐらすことではなく、手、足、体を使って動くことだ」²⁶⁾と同様の言葉で語りかけており、考えるために行動することを重視していたことがうかがえる。

さらに、明治学院において、学生として授業の改革を求めるストライキも実施した。天達は、A先生の講義は「新聞や雑誌を読んできて、それらを大講演会のように大声でしゃべるだけで体系的な社会事業の講義ではありませんでした」とし、「授業を変えることを要求したストライキを私たちの学年だけがやりました」と語っている²⁷⁾。『記念樹とともに—明治学院大学社会学部50周年特集—』の巻頭には、学生13名が写り、「昭和6年5月2日、ストライキの記念、神楽坂土堤公園にて」と説明された天達所蔵の写真が掲載されており、授業の改革を求めるストライキは1931年春頃に行われたと考えられる。

このように、天達は明治学院に入学後、セツルメントでの活動や授業改善を求めるストライキ、伝道など様々な活動に参加したが、その学生生活は長く続かなかった。1931年秋に、天達は「ストライキの責任をとるようなとらないような気持ち」に加え、軽い咯血をしたことで診察を受けた時、「東京にいたら死ぬ」と言われたために、退学届を出して故郷の下関に帰ることになったのである²⁸⁾。

2 左翼思想への関心

1929年秋にアメリカ合衆国で発生した世界恐慌の影響を受け、日本では1930年から1931年にかけて経済の危機的状況に陥った。そして、天達が明治学院に入学したのは、世界恐慌の真っ只中の1930年4月であった。こうした状況の中で、少なくない若者が自らの将来や社会に危機感を抱き、左翼思想に関心を持つようになったが、天達もそうした若者の1人であった。

天達は下宿先で社会科学の入門書の講読会を行ったこと、明治学院の授業ではマルクスやレーニンの社会科学にふれる講義はなかったが、A先生がメーデーの話をしてきたことを語っている²⁹⁾。すなわち、天達とマルキシズムとの出会いは明治学院に入学して以降だと思われる。下関で極めて貧しい生活をしてきた朝鮮人の姿を憂い、社会の問題を学びたいという明確な意思を持って明治学院に入学し、セツルメントを通じて

社会の問題に向き合うようになった天達は、平等な社会を志向する左翼思想に関心を持つようになったのであろう。

だが、学生による左翼運動が進むことに対し危機感を覚えた国は、学生の思想左傾の原因並びに対策の問題を憂慮したため、1931年7月に学生思想問題調査委員会を設置し調査を行っている。また、明治学院においても1931年度に13名、1932年度に9名、1933年度に6名の学生が検挙されており³⁰⁾、天達がかかわった学生セツルメントも、共産主義学生退学事件で社会科から退学者が出たことの影響と、赤字のために運営の継続が困難になったことから、1934年3月に一旦閉鎖されるにいたった³¹⁾。このように、国は厳しく左翼思想を取り締まったが、天達は左翼思想に関心を持ち続け、1931年秋に明治学院を退学した後は、後述するように左翼的な立場から労働運動にかかわるようになった。

天達と同じ下関教会に通っていたキリスト者の1人に、河村幸次郎(1901年～1994年)がいる。河村は、下関における呉服商「伊勢安」の経営者であり、実業家として活動しただけでなく、文芸や芸術などの様々な文化活動も行った著名人である³²⁾。天達は、労働運動を通じて出会った福田正義らが発行した雑誌『展望』の第2号以降に原稿を寄せたが、伊勢安は『展望』の売捌所となるなど、河村は文化・芸術に対する支援も行っていた。

このように、天達は教会を通じて出会った河村と交流していたが、福田の証言によると、河村は天達について「あの男はすばらしくまじめなクリスチャンであったが、どうして左傾したのかわからん」と語っていたという³³⁾。河村の発言がいつごろなされたものかは明らかでないが、河村にとっては「まじめなクリスチャンとしての天達」の印象が強かった様子がうかがえる。だが、天達は教会に通い続けながらも、次第に労働運動にかかわっていくようになったため、河村は天達を「左傾した」と表現したのであろう。これに対し、天達と共に労働運動を行った福田は、天達が「人生へのまじめさ、純粋さ、人への心の温かさからクリスチャンになり、左翼運動にはいるようになった」と天達の行動に理解を示している³⁴⁾。

第3章 下関における労働運動

1 不況下における下関への帰郷

下関に戻った後の天達について、略年譜では「肺結

核にかかり、ストライキの責任をとるような意味も含めて退学し、下関にもどり療養生活をおくる。この間、地方新聞社会部記者、父の鉱山事業所事務員などを勤める。下関では、市内居住の失業朝鮮人・日本人による『日本人朝鮮人失業者同盟』創設にかかわり、逮捕されたこともある」と説明されている。この記述や、労働運動を共に行った福田の証言等により、明治学院を退学した後、下関に戻った天達は概ね以下のような活動を行ったと考えられる。

まず、療養しに戻った下関で天達が最初に取り組んだのは、当時非合法とされた日本共産党の指導下で結成され、特高警察によって「極左翼系」の労働組合とされた日本労働組合全国協議会（全協）にかかわる労働運動である。しかし、特高警察の弾圧や自らの逮捕経験によってこの運動は続けられず、その後は門司新報社で『門司新報』の社会部記者として働いた。そして記者を辞めた後は、父が事務所長となっていた石川県の鉱山事業所の事務員として働いていたが、二・二六事件を知ったことを期に1936年春に明治学院に復学している。つまり、天達は下関で労働運動を行い、逮捕される経験を経た後、『門司新報』の記者と鉱山事業所事務員という2つの仕事についている³⁵⁾。

それでは、天達はなぜ結核の療養のために帰郷した下関で、労働運動に参加したのだろうか。天達が下関に戻った時期は、世界恐慌の影響により国民の生活が厳しい状況に置かれていたが、それに対する社会的な支援の仕組みも限られていた。たとえば、工場労働者を守る法律として1911年3月に工場法が公布され1916年9月に施行されたが、例外規定も多く、労働者を守る機能が十分でなかった。実際、経済が停滞していた1930年前後には、産業合理化によって失業者が増加し、賃金の引き下げや解雇も頻繁に行われた。また、1931年は冷害による凶作で農村の不況がどん底となり、娘の身売りも激増していた。

さらに、社会保障制度についても、恤救規則に代わり1929年4月に救護法が公布されたが、予算不足を理由に実施されず、全国の方面委員らの働きかけによって1932年1月まで実施されることがなかった。また、1922年4月に健康保険法が公布されたが、関東大震災の影響によって1927年1月まで施行されず、その内容も強制適用の対象は工場法・鉱業法の適用を受けている工場または事業場で働く年収1,200円以下の常用従業者のみで、臨時雇用従業者および年収1,200円を超える者は対象外であった。つまり、当時は労働

者を守る社会保障制度として、一部の常用従業者のみを対象とした補償内容が不十分な健康保険しかなかった。そのため、たとえば仕事が原因で障害を負った人、失業者等の生活保障はなされなかったのである。

明治学院で社会事業を学んだ天達は、世界恐慌の影響下で生活に苦しむ国民が活用できる労働法制、社会保障法制がほとんどない現実に直面した。他方で、同じ時期に天達は労働者の団結を目指すマルキシズムと出会い、その理論と実践に惹かれていった。こうした状況の中で、全協は1931年3月29日に日本労働組合全国協議会中央常任委員会ならびに失業者同盟全国準備委員会の名で、失業反対闘争と失業者の組織方針を発表した。そこでは、「失業は今や資本主義制度崩壊の大きな要因」とし、日本では「失業者が既に250万を突破し家族を合計すれば800万に達してゐること」、そして「農業危機と結合した現下の恐慌は歸農者の歸農を不可能にし何等の社会保険もないことと相待つて、失業者の生活を絶望にしてゐる」と問題を指摘している。その上で、「失業に対する闘争は失業者のみの問題ではなく全ての労働者、即ち、失業労働者、就業労働者、労働婦人、労働青年、日本人労働者、朝鮮人、臺灣人労働者、労働者の家族の共通の闘争であることを、実践を通じて示し失業に対する闘争を『失業を生み出す制度の打破』『失業と飢餓の資本家地主の政府打倒』の闘争に高めねばならぬ」と訴えていた³⁶⁾。

このように、日本人のみならず外国人も含めたすべての労働者が団結して失業に対する闘争をすること、そして失業を生み出す制度の打破を目指すという全協の方針に、天達は賛同したと考えられる。そして、天達は結核の療養中にもかかわらず、労働運動に参加して、伝道場で老人に教えられた「足で考える」という第一歩を踏み出すことを選んだ。

2 労働運動の仲間たちとの出会い

1920年代後半に経済が停滞する中で、山口県においては労働組合の組織化が進められて各地で争議が行われた。下関市でも、下関志摩鉄工所（1928年）、下関日発鉄工所（1929年）などで争議が行われている³⁷⁾。このように、下関における労働運動は、既に1920年代後半より広がりを見せていたが、そこで活躍した人物として、山本利平（1903年～1986年）があげられる。山本は山口県阿武郡山田村（現・萩市）の被差別部落で育ち、1922年3月に全国水平社が創設された後、部落解放運動に生涯をささげることを誓

い、水平社下関支部で1924年4月より活動を始めていた。度重なる逮捕によって、その活動は順調にはいかなかったが、獄中での学習や出獄してからも様々な書物を読む中で、山本は水平運動と労働運動の連携の必要を感じるようになり、次第に労働運動にもかかわるようになった。

山本は、1929年に山下富太らとともに、「下関合同労働組合（下関市西部一般労働組合）」（組合員130人）を結成し委員長となった。当時無産運動を行っていた山下は、無産政당을結成し1930年に市議会議員となった。山本は山下への支援活動を行いながら、1930年5月1日に下関でメーデーを組織したが、これは山口県内で初めて行われたメーデーであった。また、山本は同年秋に彦島の三井クロード窒素工場で争議の指導を行うなど、下関の労働運動界において知らぬ人はいない存在となっていた。

こうして山本が下関で労働運動を進めていたころ、左翼思想に関心を持った若者たちも活動を始めていた。たとえば、1929年より国鉄下関車掌所で働くようになった折井長司を中心に、『戦旗』や『プロレタリア科学』の読者会が行われた。また1931年には、プロレタリア科学同盟山口県支部が長府にでき、折井、井町喜久雄、川島義雄が中心となって活動を進めていた。全協は水面下での活動を強いられていたが、若者たちはやがて、山本が1932年7月はじめに下関で開店した「喫茶モロッコ」に集うようになった³⁸⁾。

労働運動家であった山本が喫茶モロッコを開いたのは、結婚後の生活の糧を得るためであった。しかし、店に来る客たちは、コーヒーを飲みながら唯物論研究に熱中したり、労働組合や無産政党组织の対策会議をひっきりなしに開いたりしたという。客の中には、長岡重助、井町喜久雄、林治らがおり、山本はちょうどこの頃に天達とも懇意になったと証言している³⁹⁾。おそらく、天達も喫茶モロッコに来る客の1人であったのだろう。同様に、喫茶モロッコに通っていた福田は、店内で何度か見かけた長岡に店の外で声をかけて交流するようになり⁴⁰⁾、後に彼らは雑誌『展望』を発行しているが、前述したように天達はこの雑誌に原稿を寄せている。このように、喫茶モロッコには左翼思想に共感する青年らが集まり、出会いや情報交換の場となっていた。そして、店主である山本も、コーヒーをたてるよりも、こうした客たちの雰囲気にかかれていき、再び労働運動のために外を飛び歩くようになった。

だが、広がりを見せていた労働運動とそれを指導す

る山本に対し、特高警察の目は厳しかった。治安維持法の制定により、治安当局は全国の主要都道府県に特別高等警察課を創設したが、下関においては警察署内に特高課が設けられた。下関の特高課に勤務していた山本操は、その創設は1931年6月であり、さしあたりの任務は「左翼分子の内偵と検挙」、「労働問題の指導取締り」、「内鮮問題の指導取締り」であったとしている⁴¹⁾。また山本は、三井クロード窒素工場での争議に続き行われた王亜製菓での争議が、「山本〔利平〕一派の策動」であり、「指導者の御大山本は検束されて、労組の中心人物はその機能を失い、万策尽きてついに争議をやめ」たと語っている⁴²⁾。特高警察が、争議を主導する山本の活動に厳しい目を光らせていた様子がうかがえる。

そうした中でも、天達は1933年4月16日に、喫茶モロッコを通じて交流を深めた山本や長岡らとともに、日本人と朝鮮人がともに参加する下関失業者同盟（略年譜で「日本人朝鮮人失業者同盟」とされたもの⁴³⁾）の創設大会を開催し、初めて逮捕されている。天達が行った具体的な労働運動については、稿を改めて論じる予定であるが、天達は既に労働運動の経験が豊富な9歳年長である山本や、同世代の仲間から学ぶことが多かったと思われる。

このように、天達は生活に苦しむ国民の姿に直面する中で、すべての労働者の団結を目指す全協の方針に賛同し、実際に労働運動に参加するようになった。そして、天達は下関失業者同盟の創設大会を開いたことで逮捕された後もなお、労働運動を続けようと模索している。つまり、天達が20歳頃から取り組み始めた労働運動は、その後の人生においても情熱を傾ける課題となったのである。

おわりに

本稿は、青年時代の天達が社会事業を学びつつ、次第に労働運動に関心を持つようになった過程に焦点を当てて論じてきた。その概要を確認すると、幼い頃から鉱山で働く父親と離れて暮らし、中学2年で母親を亡くした天達は、人生について考える中でキリスト者となり、建築設計に熱中したり、教会で出会った仲間らと同人誌を作ったりする中学時代を過ごした。そして、社会の問題を学びたいという動機で明治学院に入学し、セツルメントで活動しつつ、社会科学の入門書の講読会を行ったことで、左翼思想に関心を持つようになった。だが、結核にかかり明治学院を退学するこ

ととなり、療養のために下関に戻ったが、そこで志を同じくする仲間と出会い、左翼的な立場から労働運動にかかわるようになっていった。

このように、天達が労働運動にかかわるようになったのは、父親の仕事の影響、朝鮮人を通じてみた貧困の深刻さ、セツルメントでの活動、マルキシズム、世界恐慌の影響の中での国民生活の窮乏、そして「足で考える」ことの重要性を教えてくれた老人との出会いなど、様々な要因と絡み合っていたことであった。また、それらに加えて、天達は母の死をきっかけとしてキリスト者となるなど、10代の頃から身近な人の死と向き合っており、結核にかかり「東京にいたら死ぬ」言われたことで、多少なりとも「自らの生死」というものを意識したことも、1つの要因だったのではないかと考えられる。当時、特高警察により「極左翼」と位置づけられていた全協の活動を行えば、捕られる可能性もあること、そしてもし留置場での暮らしとなれば、その環境は結核の治療に必要な「大気・安静・栄養」とはほど遠く、最悪の場合には生命が脅かされることは予想がいただろう。それでも、天達は安静にしていることを選ばず、伝道場で老人に教えられた「足で考える」という方法で労働運動に参加した。すなわち、天達は自らの病気に向き合いつつも、何としてでも行わなければならないという強い使命感を持って労働運動に参加したと考えられる。

以上のように、本稿では天達が社会事業を学びながら労働運動に関心を持ち、実際に参加に至った過程について論じてきた。今後の研究においては、下関失業者同盟の創設をはじめ、天達がかかわった労働運動の具体的な内容について論じたいと考えている。

謝辞

この研究を遂行するにあたり、福田正義記念館の本田美沙氏から資料や情報のご提供をいただきました。また、三輪従道氏からは、下関教会や戦前のキリスト者について様々なお話を聞かせていただきました。深謝申し上げます。

付記

本研究はJSPS 科研費17K13878の助成を受けた研究成果の一部である。

註

* 愛知県立大学教育福祉学部准教授

1) 天達忠雄 (1979)「社会科から社会学部へー1 教員の年代記メモー」明治学院大学社会学部50周年記念実行

委員会『記念樹とともに一明治学院大学社会学部50周年特集一』209-217。なお、天達の略年譜が最も早く掲載されたのは、明治学院大学社会学部 (1984)『社会学・社会福祉学研究』65・66、27-30であり、その後、日本福祉大学 (1986)『研究紀要』69、126-128にも同様のものが掲載されている。本稿では、若干の修正が行われ、『天達忠雄追悼文集』に掲載された最新版となる略年譜を参照する。

- 2) 内務省警保局保安課編 (1943)『特高月報 (昭和18年11月分)』内務省警保局保安課、29
- 3) 浦辺史・重田信一・五味百合子 (1986)「座談会 戦時下の社会事業と社会事業研究所の活動—天達忠雄氏を偲びつつ—」日本福祉大学『研究紀要』69、67
- 4) 下関市市史編修委員会編 (1958)『下関市史 市制施行以後』下関市役所、679
- 5) 同上、222-235
- 6) 同上、699-700
- 7) 樋口雄一 (1990)「下関時代の天達先生」天達玲子編『天達忠雄追悼文集』235
- 8) 天達忠雄・坂寄俊雄編 (1954)『日本の労働者』東京大学出版会
- 9) 坂寄俊雄 (1984)「学者・歌人・キリスト者—天達忠雄氏の思い出—」『文化評論』281、新日本出版社、128
- 10) 天達忠雄、前掲註1)、211
- 11) 三吉明・石川文夫・天達忠雄・大竹新助・小川政浩・紙本義雄・館逸雄・渡辺栄 (1979)「座談会 守りつづけた『抵抗精神』弾圧と挫折の学園生活 昭和3年から戦中まで」明治学院大学社会学部50周年記念実行委員会編『記念樹とともに一明治学院大学社会学部50周年特集一』37
- 12) 下関教会の牧師・三輪従道氏に調べていただいたが、牧師や長老の名前を除き戦前の記録は残っておらず、2016年7月現在、教会に通っている最高齢の方は1933年生まれということで、天達を直接知る人を確認することは出来なかった。筆者が2016年7月30日に下関教会で三輪氏に行った聞き取りによる。
- 13) 天達忠雄、前掲註1)、211
- 14) 天本一雄 (1990)「はすのはな」天達玲子編『天達忠雄追悼文集』65
- 15) 天達忠雄 (1943)「社会事業研究所 東北農村調査報告 (Ⅵ) 東北農村生活片々」『厚生問題』27(12)、43-73
- 16) 天本一雄、前掲註14)、65
- 17) 天達忠雄、前掲註1)、211
- 18) 三吉明・石川文夫・天達忠雄・大竹新助・小川政浩・紙本義雄・館逸雄・渡辺栄、前掲註11)、37
- 19) 明治学院編 (1977)『明治学院百年史』明治学院、355
- 20) 同上、354

- 21) 同上、356。なお、遠藤の研究では、『明治学院百年史』では最初のセツラーは2人説をとっているが、セツルメントで実質的な学生指導にあたった三好豊太郎がセツラーは3名だったと証言しており、その3人目は他の資料によって、塩田章と考えたいと論じている。遠藤興一(1990)「若き日の天達忠雄とその周辺―戦時下社会事業の一断面―」天達玲子編『天達忠雄追悼文集』286-287
- 22) 三吉明(1990)「セツルメント時代」天達玲子編『天達忠雄追悼文集』84-85
- 23) 明治学院編、前掲註19)、356
- 24) 三吉明、前掲註22)、84-85
- 25) 天達忠雄、前掲註1)、212
- 26) 藤堂智子(1990)「きびしさと愛にみちていた先生」天達玲子編『天達忠雄追悼文集』218
- 27) 天達忠雄、前掲註1)、212
- 28) 同上、212
- 29) 同上、212
- 30) 社会問題資料研究会編(1972)『社会問題資料叢書 第1輯 最近に於ける左翼学生運動(思想研究資料 特輯第85号)』東洋文化社、366
- 31) 明治学院編、前掲註19)、357。なお、戦前の明治学院においては、学生セツルメントが一回中断されて、再び復活している。最初の活動は第一次セツルメント、再開後の活動は第二次セツルメントと呼ばれている。天達はその両方にかかわっているが、本稿で取り上げたのは第一次セツルメントである。
- 32) 河村は美術コレクターでもあり、1983年に下関市立美術館が開館された際に、高島北海、岸田劉生らの作品約300点を寄贈した。これらの作品は、河村コレクションとして所蔵されている。
- 33) 福田正義著、長周新聞社編(2002)『展望前後 福田正義 戦前の斗い』長周新聞社、37
- 34) 同上、38
- 35) 福田は1935年から門司新報社で働き始め、天達も一緒に働いていたとしている。これに対し、天達は石川の鉱山で働き始めて2年近く経ってから明治学院に復学したと語っており、1933年から1934年頃までは門司新報社で働き、1934年頃から1935年には鉱山で働いていたと考えられる。ただし、福田は1935年頃に天達と共に門司へ柳瀬正夢を訪ねたとも語っており、天達が石川県で働いていた頃にも、時折下関に戻っていた時期があり、門司新報社とのつながりがあった可能性もある。
- 36) 「研究資料 日本労働組合全国協議会」内務省警保局保安課編(1931)『特高月報(昭和6年3月分)』内務省警保局保安課、47
- 37) 山口県商工労働部労政課編(1974)『山口県労働運動史 第1巻』山口県、20
- 38) 尾崎勇喜・杉尾敏明編著(1979)『気骨の人・山本利平』文理閣、95。これに対し、福田正義は、1931年夏に喫茶モロッコを通じて長岡重助と知り合ったとしている。福田正義著、長周新聞社編、前掲註33)、59-61。本稿では山本の証言により、1932年7月開店とした。
- 39) 尾崎勇喜・杉尾敏明編著、前掲註38)、99。当該部分では「青山学院大学の天達忠雄教授と懇意になったのもこの頃だった」と説明されているが、これは明治学院の誤りであると考えられる。なおこの本は、編著者である尾崎と杉尾が、「御本人から聞き取りましたものに忠実にしたがいながら、著者が手を加え記述したもの」(2頁)である。
- 40) 福田正義著、長周新聞社編、前掲註33)、60-61
- 41) 山本操(1972)『風雪五十年』防長新聞社、62-63
- 42) 同上、72-73。ただし、〔利平〕は筆者の補足である。
- 43) 『馬関毎日新聞』(1933年4月18日)及び『門司新報』(1933年4月18日)において、「下関失業者同盟」と表記されていたため、本稿ではこれに従った。